

## CASE 5

NPOの取り組みを  
生徒に体感  
させている先生

きっかわ・あきこ／キャリア教育副主任、宗教部の副部長・人権教育の主任、インターアクトクラブ顧問。教員歴15年。民間企業で営業職を経験した後、2000年に山口の中学校で教員キャリアスタート。2001年に百合学院に着任。さまざまな校外活動を通じてNPOの人々と知り合い、現在NPO法人カラーバスの理事を務める。

### 国際協力や地域貢献のNPOとどんどん 結びつきをもち、学校や生徒につなげている

吉川晶子先生

百合学院高校(兵庫・私立)



#### 大学生はすごいと思ったとき 自分のスイッチが入った

教員としての仕事のほかに、日本とネパールの中学生をつなぐNPOの理事も務める吉川先生。自ら頻りにスタディツアーに参加したり、そこで知り合った人々やその人脈で学校でのさまざまな講演会やイベントを企画するなど、その活動はアクティブという言葉では片付けられないほどだ。しかし意外なことに、当初はすべて「仕事のためだからやらなきゃ」と、受身的に始まったという。「百合学院はカトリック系で募金活動を行っているので、支援先のシエラレオネを訪問してみたことが最初の

## 学ぶことが大好き！ 自分のワクワクを 生徒と共に感じたい

転機でした。2006年の学校の総合的な学習の時間(以下「総学」)のテーマが「国際理解協力」。それまで全く興味のないテーマでしたが、現地に行つて日本との大きな違いに衝撃を受け、国際協力に目覚めました」

その後、2010年に第2の転機が訪れる。ハーバードスタディツアーに個人で参加したからだ。

「学校と家との往復だけの生活がいやで、パンチのあることをしたいと思つて参加したのですが、参加者がすごい人ばかりで予想以上の刺激を受けました。参加者のひとりの大学生が帰国後にイベントに呼んでくれて、そこからNPO活動をしている学生たちとの人脈が一気に広がりました」

特に、ラオスに小学校を建てた大學生との出会いが大きかった。百合学院での人権講演会に講演してもらったほか、その学生の人脈で多数のNPOに、総学の授業やインターアクト部の活動に協力してもらった。

↓吉川先生の最初の転機となったシエラレオネ訪問。日本との違いに衝撃を受け、その後の校内・校外での国際協力活動へのきっかけとなった。



#### 世の中のすてきな人と生徒をつなぐコーディネーター役

学生たちとの出会で人脈の広がりに気づいた吉川先生は、その後さまざまなNPOの人に自ら会いに行き、学校行事に招待したり、生徒が参加できる企画を作ってきた。例えば、ホームレス問題に取り組むNPOに声をかけ、大阪の釜ヶ崎について学ぶツアーに生徒を参加させた。また、自分が参加しておもしろいと思ったイベントを自校向けにアレンジし、次々に開催している。

例えば、不要になったおもちゃや交換会と防災教育を組み合わせ、子



→今年の8月に百合学院で行った「みんなのサマーセミナー」のスタッフたちと。2日間で全171講座も開講し、生徒たちもスタッフとして各講座を担当した。



←第2の転機となったハーバードスタディツアー。写真のTeach for Americaなど、さまざまな社会企業を訪問。大きな刺激を受ける。



PLUS ONE

校外で得た経験や人脈を  
すべて生徒参加につなげている

「百合学院は総合的な学習の時間に非常に力を入れていた時期があり、教員数が少ないなかで、各年のテーマごとに授業を考えて作る機会が多数あり、それらの経験のなかできっちゃん（吉川先生）も鍛えられていったように思います。国語の教科と、当校でも多忙を極めるコースの担任を6年も続けてもち、立派に卒業させながら、きっちゃんは自身の多様な校外活動を生徒参加につなげ、多くの教員を巻き込んで行っています。パワフル、アクティブかつ、何ごとにも手を抜かないのです。きっちゃんこそ、新しい教員像！心から期待しています」



百合学院中学校・高校  
大森順子先生  
進路指導部長・キャリア教育主任。1982年に百合学院に着任、2001年より教務部長、進路指導部長などを歴任。

どもたちが防災について学べる「イザ！カエルキャラバン」。各地で行われているこのイベントをやりたいと考えた吉川先生は、学校を説得し、予算をロータリークラブに交渉。関西の企業や近隣の幼稚園や小学校に参加を呼びかけ、2014年から行っている。

また、愛知で行われているサマーセミナー（市民講座）の尼崎市版をやるうと、実行委員になった吉川先生は開催場所を自校に誘致。今年の夏に、インターアクト部の生徒をスタッフとして開催した。

「世の中にはすごい人が大勢いて、私はつなぎ役をしているだけ」と語るが、決して簡単ではない活動の原動力は何なのだろうか。



↑「イザ！カエルキャラバン」は、学校の有志のクラブすべての生徒と先生に協力をお願いし、百合学院の小学校、幼稚園の先生にも協力いただいて開催した。

「自分自身、学ぶことが好きなので。私も生徒みたくないもの。まだまだ勉強したいことがたくさんあります。それを自由にやらせてもらっている学校には感謝するばかりです。百合学院で一番学んでいるのは私かもしれません（笑）」



教室と『よのなか』をつなぐ「架け橋」でありたい。自分が動けば、きっと社会は変えられる

CASE 6

「よのなか」を  
生徒に  
つなげる先生

かどばやし・よしかず／進路指導部、興南アクト顧問。教員歴10年。2004年、大阪で大学の職員として就職。そこで新入生がすぐに退学したり不登校生が多いことを知り、中学・高校で進路を真剣に考える必要性を痛感。2006年大阪の私立高校に非常勤講師として着任。学生時代から関心があった沖縄での教員を志望し、2008年に興南学園着任。

生徒が各界の著名人にインタビューする「夢のバトン」プロジェクトを  
しかけ、本を出版した

門林良和先生

興南中学・高校（沖縄・私立）

正解のない「社会」を教える  
「よのなか」科との出会い

教員になって3年めに興南学園に着任したころ、門林先生は社会科教員として、正解がない「社会」を扱う教科なのに1つの正解を求める学校教育に疑問を抱いていた。

「東京都で義務教育初の民間人校長になった、藤原和博さんの沖縄での講演で「よのなか」科のことを知り、「これだー」と思いました」

「よのなか」科は、学校で教えられる知識と実際の世の中との架け橋

になる授業だ。その日のうちに上司に「こういう授業をやらせてほしい」と直談判し、一気に動き出した。藤原氏のセミナーに参加して実践を学び、翌年の2009年から授業を開始した。

「よのなか」科には、授業のテーマについてプロとして語ってくれるゲストティーチャーが必要です。最初の授業のテーマを『死刑制度』として弁護士を探していたら、保護者にいることがわかり即お願しました」

学校外の社会人を探すことは、1回やれば次からは難しくないと門林先生は語る。

「ゲストが次のゲストを紹介してくれたり、同僚や校外の知人に『こういう人を探している』と何かしら発信すれば、必ず誰かが拾ってくれます。校外の社会に1つでも自分の窓口をもち、自然と人脈はひろがっていくと思います」

### 社会への窓口作りと授業力のアップを追い求める

「よのなか」科を毎回の授業で取り入れることは難しかったため、同様の活動を部活動として続けようと考えた門林先生は、「社会科部」(現「興南アクト」)を立ち上げた。

「中高生合同の部で、最初は沖縄観光のツアーを生徒たちが企画して、県内のツーリストの社長にプレゼンする活動からスタートしました。保

↓藤原和博氏が提唱する[よのなか科]の授業を実践。依頼があれば、外部での授業も積極的に行っているようだ。



護者や教員ではない大人の評価を受けることで、生徒たちは大きな自信を得たようです」

2011年からは県内外で活躍する大人たちに生徒が直接インタビューを行い、沖縄の若者たちへのメッセージを集める「夢のバトン」プロジェクトを開始した。対象は、池上彰氏、原辰徳氏、茂木健一郎氏などの著名人をはじめ、県知事、漫画家、ミュージシャン、経営者、NPO代表など多様で錚錚たるメンバーだ。

「生徒や私がいいたいと思った人に直接依頼しました。沖縄の子どもたちのためならと、ほぼすべての方が快諾してくださいました」

2年間で42名もの人にインタビューを行い、まとめた記事は2013年に『15歳へのバトン』という書籍とし



て出版した。インタビュー活動は現在も続いている。

教室から一歩踏み出させることで、生徒に新しい自分を発見させたいという門林先生。

「生徒たちがこれからの時代を生き抜くには、自分の考えをもち、それを伝える力が重要です。その力をつけるために外の世界に触れさせる経験も必要ですが、活動の土台となるのはやはり教科の授業。だから授業がもっともつとつとまくなりたい。授業がうまい先生は相手を理解する力や表現力があり、クラスケアにも長けています。授業力は教員力を上げることにつながるはず。授業力アップと社会とつながることの両輪を、これからも追い求め続ける教員でありたいです」

↑「夢のバトン」プロジェクトでは、池上彰さんをはじめ、各界の錚錚たる著名人に生徒たちが直接インタビューを行い、記事をまとめた。



←「夢のバトン」プロジェクトの内容を『15歳へのバトン』という書籍として発行。売り上げは沖縄の貧困問題などに携わる団体に寄付している。



→興南アクトの活動の柱のひとつが、他県からの修学旅行生を案内する「首里城ガイド」。琉球王国の歴史を紹介しながらのガイドが好評だ。

## PLUS ONE

### 常識にとらわれない活動でますます生徒に新しい発見を!

「これほど多様化している社会を生き抜く力を、生徒に身につけさせるために、教員には専門教科を教える以外の力が求められています。門林先生は多種多様な社会人を学校に連れてきてくれますが、そうした社会人こそ、生徒たちに将来の道筋を見せてくれる存在です。先生の活動により、沖縄や日本全体、ひいては世界のことを考えられる、グローバルで戦える力を備えた生徒を育めると期待しています。門林先生にはこれからも常識にとらわれずにどんどん外に出て、外で得たもので学校や生徒たちに新しい発見をさせてほしいですね」



興南学園 理事長・校長  
我喜屋優先生

2010年に野球部を甲子園の春夏連覇に導いた名監督でもある。